

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 勅撰三集におけるハスのイメージに関する受容と変容

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-24 キーワード (Ja): 勅撰三集, ハス, 受容, 変容 キーワード (En): 作成者: 姜, 涓 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000070">https://doi.org/10.57529/0002000070</a>

# 勅撰三集におけるハスのイメージに関する受容と変容

## The reception and transformation of the lotus imagery in the Three Chokusenshu

姜 涓

キーワード：勅撰三集 ハス 受容 変容

Key Words: Three Chokusenshu lotus reception transformation

### 要旨

日本において、弘仁・貞観期には唐の影響を強く受け、文芸界では漢文学が盛んになり、『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』の勅撰三集が編纂された。勅撰三集の中で、ハスに関する漢詩が11首収録されている。本論文では勅撰三集におけるハスのイメージに関する、中国古典詩歌の受容と変容、及びその原因について考察した。

考察の結果、勅撰三集におけるハスは、主に「佳人」、「素晴らしい物」と「悲秋」の三つのイメージを持っていることが分かった。中国古典詩歌の影響を受けた漢詩人らは、ハスの「佳人」のイメージを取り入れて詩の創作に活かしているだけでなく、ハスを詠んだ詩語を借用したり、転化して使用したりしている。一方で、勅撰三集ではハスの消極的なイメージを愛用し、ハスを詠んだ漢詩の尾聯において君王の恩徳を称える傾向が見られる。これは日本の「悲美」の美意識、君臣唱和のパターンと中日官吏登用制の違いに起因するものと推測される。

### Abstract

During the period of Kōnin and Jōgan in Japan, there was a strong influence from the Tang Dynasty, and the field of literature thrived with the popularity of Chinese classical literature. The Three Chokusenshu (three anthologies compiled by Imperial command) of “Ryounshu,” “Bunka Shureishu,” and “Keikokushu,” were compiled during this time. Among these anthologies, there are eleven poems dedicated to the lotus flower. This thesis explores the imagery of the lotus in the Three Chokusenshu and examines the reception and transformation of classical Chinese poetry in Japan, as well as the underlying causes.

Through the analysis, it was discovered that the lotus in the Three Chokusenshu primarily embodies three images: “the beautiful woman,” “magnificent entity,” and “the melancholy of autumn.” Influenced by classical Chinese poetry, the poets not only incorporated the image of the lotus as “beautiful woman” into their poetic creations but also learned and transformed poetic expressions related to the lotus. Conversely, in the Three Chokusenshu, a tendency can be observed where the lotus is associated with negative imagery. Additionally, the concluding verses of classical Chinese poems dedicated to the lotus often praise the benevolence of the emperor. This can be attributed to the Japan’s aesthetic sensibility of “the beauty of sorrow”,

the pattern of mutual poetic exchange between rulers and subjects, and the differences in the bureaucratic appointment systems between China and Japan.

## はじめに

詩歌の創作において、詩人は常に主観的な感情を周囲にある客観的な対象に込め、自身の内面を表現すると同時に、それに独自のイメージを与える。ハスは古くから夏から秋にかけての代表的な植物として多数の文人に詠まれている。中国において、『詩経』にはハスを詠む漢詩は2首のみ記載されているが、唐の時代になるとその数は約2000首に達した。その一方、日本において、弘仁・貞観期には唐の影響を強く受け、文芸界では漢文学が盛んであった。この時期、嵯峨天皇の命により弘仁五年と九年には『凌雲集』と『文華秀麗集』が編纂され、淳和天皇の命により天長四年に『経国集』が編纂された。勅撰三集においても、いくつかのハスに関する漢詩が収録されている。

いうまでもなく、唐風謳歌の時代に成立された勅撰三集が、中国六朝と唐の漢詩から強い影響を受けている。これまで中日両国で行われた研究では、勅撰三集における中国古典詩歌の受容について多くの研究があるが、植物のイメージという視点、特に「ハス」のイメージに着目した考察はほぼ見当たらない。勅撰三集において、ハスがどのようなイメージを持っているか、ハスのイメージに関して、中国古典詩歌への受容と変容状況はどうであろうか、その状況がどのように生じたかといった問題への考察はまだ余地がある。そのため、本論文はハスのイメージを中心に、勅撰三集におけるハスのイメージに関する中国古典詩歌の受容と変容を検討してみたい。

### 一、勅撰三集におけるハスのイメージ

「ハス」という植物に関連する漢字として、「蓮」と「荷」が用いられており、また「菡萏」、「芙蕖」、「芙蓉」、「水芙蓉」、「水芝」といった別称も存在する。これらのキーワードを使用して勅撰三集を調査した結果、ハスに関連する詩、賦、および対策文は合計11首がある。この11首の漢詩を分析したところ、表1の示した通り、勅撰三集におけるハスのイメージは主に三つがある。それぞれは「佳人」

のイメージ、「素晴らしい物」のイメージと「悲秋」のイメージである。

表 1 勅撰三集におけるハスのイメージ

詩集	作者	作品名	詩の句	イメージ	作品数
『凌雲集』	良岑安世	「九月九日侍宴神泉苑、各賦一物、得秋蓮、應製」	妖艷佳人望已斷 為因聖主水亭傍	「佳人」のイメージ	1首
『凌雲集』	嵯峨天皇	「夏日皇太弟南池」	岸影見知楊柳處 潭香聞得芰荷間	「素晴らしい物」のイメージ	3首
『凌雲集』	藤原冬嗣	「神泉苑雨中眺矚、應製、一首、探得初字」	岸水飛還落 池荷卷且舒		
『文華秀麗集』	嵯峨天皇	「夏日臨泛大湖」	呂女採蓮伴 村翁釣魚徒		
『凌雲集』	嵯峨天皇	「秋日皇太弟池亭賦天字」	岸柳帷初斷 潭荷葉欲穿	「悲秋」のイメージ	7首
『凌雲集』	淳和天皇	「九月九日侍讌神泉苑、各賦一物、得秋露、應製」	池際凝荷殘葉折 岸頭洗菊早花低		
『文華秀麗集』	仲雄王	「奉和重陽節書懷」	菊浦早花霜下發 荷潭寒葉水陰穿		
『文華秀麗集』	姫大伴氏	「晚秋述懷」	菊潭帶露餘花冷 荷浦含霜舊蓋殘		
『文華秀麗集』	嵯峨天皇	「神泉苑九日落葉篇」	虛條縮槭楓江上 舊蓋穿迺荷潭裡		
『経国集』	嵯峨天皇	「重陽節神泉苑、賦秋可哀」	荷潭帶冷無全葉 柳岸銜霜枝不柔		
『経国集』	和氣真綱	「重陽節神泉苑、賦秋可哀、應製」	霜凝菊兮蕭蕭 露留荷兮冷冷		

## 二、勅撰三集におけるハスのイメージに関する受容

勅撰三集は唐風謳歌の時代に編纂された漢詩集であり、中国古典詩歌から格律、典故、詩語のイメージなどの面で大きな影響を受けていることは明らかである。ハスのイメージに関して、中国古典詩歌への受容状況はどうであろうか。以下では、イメージと詩語という二つの方面からこの問題を検討する。

### (一) イメージの受容

良岑安世の漢詩「九月九日侍宴神泉苑、各賦一物、得秋蓮、應製」の尾聯で、

「妖艷佳人望已斷」と詠まれている。この詩において、詩の前半では「佳人」の容貌について具体的に描写されていないが、尾聯において直接的にハスを妖艷な佳人として描写することから、詩におけるハスの「妖艷佳人」のイメージが明確に示されている。

中国において、ハスは『詩経』から女性のイメージを持つようになった。俞香順(2005)によれば、南朝時代の詩人らはハスの艶美という側面への発掘に注目していたと述べている<sup>(1)</sup>。この時代には「採蓮曲」などが作られ、ハスの花と香りを詠んでハスを妖艷な佳人と結び付けている。例えば、梁・簡文帝は「採蓮曲」で「江花玉面兩相似」<sup>(2)</sup>と、梁元帝は「採蓮曲」で「蓮花乱臉色」<sup>(3)</sup>と詠み、ハスを女性の容貌と呼応させたり対照させたりしている。そのほか、劉孝威は「月織張敞画、荷妖韓寿香」<sup>(4)</sup>という詩の句で「荷香」を「妖」と称している。このような風潮は盛唐期まで続き、「六郎嬌面」を通じて最高潮に達した。このような艶麗な漢詩は徐陵によって編纂された『玉台新詠』に多く収録されている。

次に良岑安世が『玉台新詠』からの影響を受けたかについて考察する。『文華秀麗集』の樂府部には良岑安世「奉和王昭君」<sup>(5)</sup>が収められている。詩の尾聯では「願為孤飛雁、歲歲一南翔」と詠まれている。ここで登場する「雁」は中国文学において最初主に望郷の詩で使用され、望郷の念を表す象徴的なイメージとされる。六朝時代には辺塞詩の発展とともに、思婦や閨怨など女性を題材とした詩において重要なイメージとなった。『玉台新詠』卷二の石崇「王昭君辞」では「願假飛鴻翼、乘之以遐征」<sup>(6)</sup>によって王昭君の望郷の念と独り身の孤独さが表現された。ここで見られるように、良岑安世は石崇と同様に「雁」のイメージを用いている。さらに、「王昭君辞」では「願假○○」という句式が使われている一方、良岑安世は「願為○○」を使用している。また、『文華秀麗集』下巻の雜詠部には良岑安世

- 
- (1) 俞香順、中国荷花審美文化研究、巴蜀書社、2005、P146。  
 (2) 吳冠文、談蓓芳、章培恒彙校、中国古典文學叢書・玉臺新詠彙校、上海古籍出版社、2014、P631。  
 (3) [宋]郭茂倩編、樂府詩集、中華書局、1998、P731。  
 (4) 吳冠文、談蓓芳、章培恒彙校、中国古典文學叢書・玉臺新詠彙校、上海古籍出版社、2014、P509。  
 (5) 「奉和王昭君」『文華秀麗集』中巻・樂府「奉和王昭君」：虜地何遼遠、關山不忍行。魂情還漢闕、形影向胡場。怨逐邊風起、愁因塞路長。願為孤飛雁、歲歲一南翔。  
 (6) 吳冠文、談蓓芳、章培恒彙校、中国古典文學叢書・玉臺新詠彙校、上海古籍出版社、2014、P146。

の漢詩「五夜月」が取められている。その漢詩において、「客子無眠投五夜、正逢山頂孤明月。一看圓鏡羈情斷、定識閨中憶不歇」と詠まれている。この短い漢詩においても、風景を描写した後に思婦が半分の筆幅で描かれている。艶情と楽府類の漢詩に限らず、詠物詩でも「征人思婦」の主題が込められている。それは『玉台新詠』の艶情観からの影響ではなかろうか。

上に論じたように、「願為○○」という句式の使用、詠物詩での「征人思婦」主題の導入により、良岑安世は『玉台新詠』から影響を受けたと推断される。したがって、ハスに「妖艶佳人」のイメージを持たせたことも、おそらく『玉台新詠』からの影響であると考えられる。

## (二) 詩語の受容と転化

ハスのイメージについて、中国古典詩歌からの影響が見られたが、詩語の面はどうであろうか。嵯峨天皇は「夏日皇太弟南池」において「岸影見知楊柳処、潭香聞得芰荷間」と詠んでいる。小島憲之(1979)は嵯峨天皇が詠んだ「岸影見知楊柳処、潭香聞得芰荷間」二句は、おそらく孟浩然「夏日浮舟過陳大水亭」の「澗影見藤竹、潭香聞芰荷」によるものであると述べている<sup>(7)</sup>。秋になると、夏にみずみずしい蓮葉は枯れたり破たりしている。この光景を見ると、嵯峨天皇は「秋日皇太弟池亭賦天字」で、「夏日皇太弟南池」の頷聯を転化し、「岸柳帷初斷、潭荷葉欲穿」と詠んだと推測される。また、屈原は『楚辭』の「離騷」篇において、「制芰荷以為衣兮、集芙蓉以為裳」<sup>(8)</sup>と詠んでおり、当時の政治闘争から離れ隠遁し、高潔なハスの花で衣装を作り、自分の徳行と人格を守ろうとする決心を表現している。良岑安世の「浦落幽人九月裳」はこの文章に基づき、ハスを幽人の衣装と詠んだと考えられる。それを除き、嵯峨天皇「神泉苑九日落葉篇」の「虚條縮槭楓江上、舊盖穿逾荷潭裡」では「楓江」という表現が使われている。『楚辭』の「招魂」篇には「湛湛江水兮、上有楓」<sup>(9)</sup>が記載され、唐・駱賓王の「餞宋三之豊城序」で「楓江連白馬之門」<sup>(10)</sup>と詠まれ、「楓江」という表現が見られる。ここから、「楓江」が中国古典詩歌から影響を受けて活用した詩語表現と推測される。

(7) 小島憲之. 国風暗黒時代の文学 中(中). 塙書房, 1979, P1405.

(8) 黄靈庚集校. 楚辭集校. 上海古籍出版社, 2009, PP91-92.

(9) 黄靈庚集校. 楚辭集校. 上海古籍出版社, 2009, PP278-279.

(10) [唐] 駱賓王撰. 宋蜀刻本唐人集叢刊・駱賓王文集. 上海古籍出版社, 1994, P143.

上述の考察から、勅撰三集において中国古典詩歌から、詩句を直接に転用したり、「楓江」などの詩語を直ちに受け入れて漢詩の創作に活用したりしていることが明らかになった。ハスのイメージのみならず、詩語の面においても中国古典詩歌からの受容が見られる。これで、ハスのイメージとそれに関する詩語は、中国古典詩歌からの影響を受けたことが明確になった。

### 三、勅撰三集におけるハスのイメージに関する変容

韓立紅(2003)は「日本文化は単に外来文化を摂取する開放性を持つだけではなく、自国に取り入れた外来文化を消化して改造し、日本化する主体性を同時に有している」と言及している<sup>(11)</sup>。唐風謳歌の時代に成立された勅撰三集は中国古典詩歌の影響を強く受けたとはいえ、日本漢詩人らの新たな創造の部分も散見される。次は勅撰三集におけるハスに関する漢詩において、漢詩人らの創造の部分があるか否かについて検討する。

#### (一) 消極的なイメージ

上述の考察により、勅撰三集におけるハスのイメージは三つだけ持っており、比較的に単一である。成其昌(2005)は、中国古典詩歌におけるハスは「君子」「佳人」「恋愛や婚姻」「悲怨」「素晴らしい物」「懐かしさ」といったイメージを持っていると述べている。<sup>(12)</sup>前に述べたように「浦落幽人九月裳」から良岑安世が『楚辞』に触れたことがあることが分かった。とはいえ、「離騷」においてハスの持っている高尚人格のイメージは勅撰三集に見当たらない。それと同時に、数量から見れば、漢詩人は「敗荷」を注目し、「悲秋」という比較的消極的なイメージを使う傾向があるとみられる。つまり、多数のイメージがある場合、漢詩人らが消極的なものにより多く注目したのである。管見によれば、その原因は日本の「悲美」の美意識にあるのではないかと考えられる。

「悲美」の美意識はある物事やシーンから悲しみを感じ取り、そこから美しさを見つけ、その悲しみを美とみなす美意識を指す。日本は島国で、環太平洋火山

(11) 韓立紅. 日本文化概論. 南開大学出版社, 2003, P4.

(12) 成其昌. 中國古代詩詞中蓮荷意象的評述. 社科縱橫, 2005 (02), PP176-177.

帯の中に位置するため、地殻活動などによって火山、地震、津波などの自然災害が頻発している。これで、美しい事物が災害の到来と共に消失し、破壊されてしまう。ここで生活してきた人々はまさにこのような美しいものが一瞬にして消え去る現実を見てその悲しみから「美」を見出す美的感覚を次第に身につけたのであろう。「悲美」の美意識は、文学創作において重要な役割を果たし、ものの滅びから感じられる悲しみや美しさを描いた作品が数多く生み出された。上代文学の『古事記』について、邱嶺・呉芳齡(2006)は、日本の文学伝統を説いている部分において、皇室歴史の記載を目的に編纂された『古事記』では、天皇の仁政より生活感情を多く記されたという主観的意図と客観的作品との矛盾は外来観念と民族固有の情趣との矛盾に由来すると述べている<sup>(13)</sup>。平安時代に成立した『源氏物語』は、その美意識が本居宣長によって『源氏物語玉の小櫛』で「もののあはれ」として解説されている。この「もののあはれ」は、悲哀の感情に限定されるものではないが、作品は一瞬の輝きと共に消え去る美しさや、儚い存在の中に宿る感情的な美、そしてその悲しい運命によって生まれる深い感銘を描き出し、日本文学史上で悲しみを美とみなす美意識の最高峰に到達したと言えるのである。その後の『平家物語』は、平家の栄華とその滅亡を描き、美しいものが儂く散っていく運命を強く表現し、悲しみと美しさが組み合わされた「悲美」の美意識を表現していると言えよう。ほかに、川端康成の小説『雪国』は、日本近現代文学における「悲美」の美意識を表した象徴的な作品である。それに、ハスのみならず、美しく咲いている桜よりも、日本文人は散り落ちた桜を好んで詠んでいる。『古今和歌集』の春歌巻(巻一、二)において、桜を詠む和歌は71首あるが、桜の落花を詠むのは50首あり、三分の二を占めている。このように、「悲美」の美意識は日本に深く定着されているといっても過言ではない。そのために、「悲美」という美意識の影響の下、勅撰三集の漢詩人らはハスの「悲秋」というイメージにより多い関心を注いでいた可能性があると考えられる。

## (二) 君王の恩沢への称え

消極的なイメージの重視のほか、ハスを詠む漢詩の尾聯で天皇の恩沢を称えるのはもう一つの特徴である。表2に示した通り、首聯・頷聯・頸聯にハスを描き、

(13) 邱嶺, 呉芳齡. 三國演義在日本. 寧夏人民出版社, 2006, P178.

尾聯で天皇の恩沢を称えた漢詩は4首がある。

表2 尾聯で君王の恩沢を詠む漢詩

作者	作品	ハスを詠む句	天皇の恩沢を詠む句
淳和天皇	「九月九日侍讌神泉苑、各賦一物、得秋露、應製」	額聯：池際凝荷殘葉折 岸頭洗菊早花低	尾聯：謬忝恩筵何所賦 晞陽湛湛被羣黎
藤原冬嗣	「神泉苑雨中眺矚、應製、一首、探得初字」	頸聯：岸水飛還落 池荷卷且舒	尾聯：從天恩盞下 不醉也焉如
良岑安世	「九月九日侍宴神泉苑、各賦一物、得秋蓮、應製」	首聯・額聯・頸聯： 神泉御苑霜氛下 靈沼秋蓮過半黃 露泛穿杯拙生玉 風吹舊眼無復香 波收隱士三秋蓋 浦落幽人九月裳	尾聯：妖艷佳人望已斷 為因聖主水亭傍
仲雄王	「奉和重陽節書懷」	頸聯：菊浦早花霜下發 荷潭寒葉水陰穿	尾聯：災不勝德古來在 況乎神哀輔自天

以上の4首はいずれも宴会で天皇への應制詩や奉和詩として作られたものである。公宴詩、侍宴詩において、君王讚徳を中心に詠み、詩人自身の思いをごく少なく込めるのは言うまでもなく少くないのである。それで、天皇の恩沢を尾聯で賛美する原因は、主に君臣唱和という性質を持っているところにあると考えられる。一方、平安時代に愛読されていた『文選』においても、公宴詩が重要な一類として記載されている。14首の公宴詩では、以下の曹植の「公讌詩」と劉楨の「公讌詩」はハスを描いた。

公讌詩

曹植

公子敬愛客、終宴不知疲。  
清夜遊西園、飛蓋相追隨。  
明月澄清景、列宿正參差。  
秋蘭被長阪、朱華冒綠池。  
潛魚躍清波、好鳥鳴高枝。  
神飈接丹轂、輕輦隨風移。

飄飄放志意、千秋長若斯。<sup>(14)</sup>

公讌詩

劉楨

永日行遊戲、歡樂猶未央。  
 遺思在玄夜、相與復翱翔。  
 輦車飛素蓋、從者盈路傍。  
 月出照園中、珍木鬱蒼蒼。  
 清川過石渠、流波為魚防。  
 芙蓉散其華、菌菴溢金塘。  
 靈鳥宿水裔、仁獸游飛梁。  
 華館寄流波、豁達來風涼。  
 生平未始聞、歌之安能詳。  
 投翰長歎息、綺麗不可忘。<sup>(15)</sup>

以上の2首の漢詩は言語描写が華美であるとともに、並び立つ場面が壮大である。それに、尾聯では直接に君王の恩沢を称える内容は見られない。それは官吏登用制度の違いにあるのではないかと考えられる。『文献通考』卷三十九辟举の部分では「蓋東漢時、選舉、辟召皆可以入仕。以郷舉里選循序而進者、選舉也。以高才重名躡等而升者、辟召也。故時人猶以辟召為榮云。」と記されている。<sup>(16)</sup>ここで漢代の「選挙(または察举)」と「辟召」という二つの代表的な官吏選挙の制度を示している。察举は孝廉、茂才などの科目に優れて上司や中央に推薦され、試用と査定を経て任命される人材任用制度で、漢代の代表的な官吏登用制度である。辟召は地方の長官や大將軍、三公九卿といった中央の長官が自分の裁量で人材を招いて任用する制度で、後漢に盛んに使われていた。魏の時代になると、地方の州郡に中正という官を派遣し、郷党の評判を参考にしてその州郡内の官僚志望者の等級を九品に分け、さらに、その等級を中央政府が決まった一品から九品に位置付けるといふ九品官人法が登場した。しかし、この時代に察举制度が完全に

(14) [梁]蕭統編, [唐]李善注, 中國古典文學叢書・文選, 上海古籍出版社, 1986, P943。

(15) [梁]蕭統編, [唐]李善注, 中國古典文學叢書・文選, 上海古籍出版社, 1986, P945。

(16) [元]馬端臨著, 文獻通考, 新興書局, 1964, P367。

廃除されなかったし、辟召の制度も依然として踏襲されていた。以上の三つの官吏登用制度はいずれも徳行、能力によって評価する制度である。上述の「公誦詩」を書いた劉楨は当時文才に優れ、曹操の辟召に応じて丞相掾属、平原侯庶子、五官将文学を務めた。

日本において、弘仁期に紀伝道が設置され、紀伝道を学んだ学生を対象とした試験が行われていたが、受験資格者はほぼ貴族の子弟だけで、人材登用の機能をよく果たしていなかった。官吏の登用と昇進は依然として家柄次第であった。貴族子弟の場合は家柄だけで官職を与えられる。その後、その官位で収めた成績や家族の関係に従って昇進できる。例えば、尾聯で天皇の徳を称えた一人の藤原冬嗣は23歳（延暦14年）に、正三位であった祖父の関係で無審査で内舍人の官職を得、のち嵯峨天皇に近侍する時にも位階の昇進が一気に加速した。<sup>(17)</sup>それで、確かな試験や人材の評判基準がないと、家柄を除いて自分の工夫も重要になり、宴会で君王の恩沢を詠むのは官吏の登用あるいは昇進に有利である。したがって、日本側は遊宴で作った漢詩において、常に君王の恩沢を詠んだのではないかと考えられる。

## おわりに

本論文は勅撰三集におけるハスのイメージに関する中国古典詩歌の受容と変容を検討してみた。検討の結果、次の三点が明らかになった。勅撰三集におけるハスは「佳人」、「素晴らしい物」、「悲秋」という三つのイメージを持っている。勅撰三集において、ハスのイメージの描きに関し、漢詩人らは中国古典詩歌からハスを詠んだ詩語を借用したり転化して使用したりしていると同時に、ハスで「妖艶佳人」を象徴するイメージを吸収し漢詩の創作に活用した。

ところが、勅撰三集におけるハスのイメージは比較的単一であり、漢詩人は「悲秋」という比較的消極的なイメージを使う傾向があるとともに、ハスを詠む漢詩の尾聯で君王の恩沢を詠む特徴がある。それは日本「悲美」の美意識、君臣唱和のパターンと中日官吏登用制の違いにあるのではなかろうかと考えられる。中国古典詩歌におけるハスのイメージが勅撰三集に一部受け入れられた。そ

---

(17) 虎尾達哉. 藤原冬嗣. 吉川弘文館, 2020, PP29-40.

れに吸収されなかった部分とその原因への考察を今後の課題としたい。

### 参考文献

- 小島憲之校注. 日本古典文学大系69・懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹. 岩波書店, 1964。  
小島憲之. 国風暗黒時代の文学 中(中). 塙書房, 1979。  
小島憲之. 国風暗黒時代の文学 中(下) I、II、III. 塙書房, 1985-1999。  
虎尾達哉. 藤原冬嗣. 吉川弘文館, 2020。  
俞香順. 中國荷花審美文化研究. 巴蜀書社, 2005。  
吳冠文、談蓓芳、章培恒彙校. 中國古典文學叢書・玉臺新詠彙校. 上海古籍出版社, 2014。  
[宋]郭茂倩編. 樂府詩集. 中華書局, 1998。  
黃靈庚集校. 楚辭集校. 上海古籍出版社, 2009。  
[唐]駱賓王撰. 宋蜀刻本唐人集叢刊・駱賓王文集. 上海古籍出版社, 1994。  
韓立紅. 日本文化概論. 南開大学出版社, 2003。  
成其昌. 中國古代詩詞中蓮荷意象的評述. 社科縱橫, 2005 (02)。  
[梁]蕭統編, [唐]李善注. 中國古典文學叢書・文選. 上海古籍出版社, 1986。  
[元]馬端臨著. 文獻通考. 新興書局, 1964。  
邱嶺, 吳芳齡. 三國演義在日本. 寧夏人民出版社, 2006。